次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

僕はまず、「二十五歳未満の者、小説を書く※べからず」という規則をこしらえたい。全く、十七、十八ないし二十歳で、小説を書いたって、しようがないと思う。とにかく、小説を書くには、文章だとか、技巧だとか、そんなものよりも、ある程度に、生活を知るということと、ある程度に、人生に対する考え、いわゆる人生観というべきものを、きちんと持つということが必要である。（中略）

小説を書くということは、決して紙に向って筆を動かすことではない。我々の平生の生活が、それぞれ小説を書いているということになり、また、その中で、小説を作っているはずだ。どうもこの本末を転倒している人が多くて困る。ちょっと一二年も、文学に親しむと、すぐもう、小説を書きたがる。しかし、それでは駄目だ。だから、小説を書くということは、紙に向って、筆を動かすことではなく、日常生活の中に、自分を見ることだ。すなわち、日常生活が小説を書くための修業なのだ。学生なら学校生活、職工ならその労働、会社員は会社の仕事、各々（おのおの）の生活をすればいい。こうして、小説を書く修業をするのが本当だと思う。

では、ただ生活さえ行ったら、それでいいかというに、決してそうではない。生活しながら、色々な作家が、どういう風に、人生を見たかを知ることが大切だ、それには、やはり、多く読むことが必要だ。

そして、それら多くの作家が、いかなる風に人生を見ているかということを、参考として、そして自分が新しく、自分の考えで人生を見るのだ。言い換えれば、どんなに小さくとも、どんなに曲がっていても、自分一個の人生観というものを、築きあげて行くことだ。

こういう風に、自分自身の人生観――そういうものが出来れば、小説というものも、自然に作られる。もうその表現の形式は、自然と浮んで来るのだ。自分の考えでは、――その作者の人生観が、世の中に触れ、折に触れて、表われる出たものが小説なのである。すなわち、小説というものは、ある人生観を持った作家が、世の中の事象によせて、自分の人生観を発表したものなのである。だから、そういう意味で、小説を書く前に、先（ま）ず、自分の人生観をつくり上げることが大切だと思う。

【『小説家たらんとする青年に与う』菊池寛】より

※べからず…「～してはいけない」

問１　―線部「小説」を書くために、筆者は何を持つことが必要であると述べていますか。文章中から三字で書き抜きなさい。

問２　この文章で筆者が主張していることについて、最も適切なものを次のアからエまでの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　小説家になるためには、文章を書く技術を身につけることが必要であり、そのために修練を積まなければならない。

イ　小説家になるためには、自分の生活を見つめ直すことが大切であり、それさえしていれば自然と小説は書けるようになる。

ウ　小説家になるためには、様々な作家が書いた文章から学び、それを参考にして、自分の人生観を作り上げることが大切である。

エ　小説家になるためには、小説を書くときの年齢が重要であり、年齢が上がれば上がるほど、より良い作品を書くことができる。

解答

問１　人生観

問２　ウ